

Covid-19 流行による 小児感染症への影響から思うこと



診療部長 兼 小児科部長 長谷川 毅

Covid-19流行以後、我が国の小児の感染症の動向は大幅に変わりました。夏風邪に関しては2020年から21年はほとんど流行せず、22年に若干の増加を認める程度でしたが、23年になってヘルパンギーナが例年より早い4月頃から急激に広がり大流行となりました(手足口病は目立った増加はありません)。RSウイルスに関しては、通常9月から12月に流行が始まるものですが、2016年で8月上旬、2017年から2019年には7月上旬と早まっています。Covid-19流行後、2020-21年シーズンは全く流行しませんでした。2021年夏前から、時期外れの大きな流行が起こり、医療関係者を慌てさせました。また、インフルエンザに関しては、Covid-19流行が始まった2019-2020年シーズンにおいて、例年より早めに立ち上がりを見せていましたが、ロックダウンとともに速やかに収束し、その後は流行が起こらずに、2022-23年シーズンに小規模の流行が出現しました。その後、夏過ぎまで完全に収束しきっていない状況が続いています。

これらのウイルスは、Covid-19感染対策としてのマスク、手洗い、いわゆる三密回避の効果でかなり減少しました。基本的に忠実かつ厳格に行動すると感染予防がしっかりできることが改めて認識できました。しかしながら、この状態を永續させることは到底無理であり、そのうち再び流行が起こってしまったのもまた事実です。さらに、再流行がかなりの大流行になること、発症年齢が上がる傾向になることも経験しました。また、休校、外出制限が続くことによる教育機会の喪失・精神的な弊害もかなり大きなものになりました。只々徹底的に感染を防御

するという方法は問題が多いです。

新規感染症に対して、共同体レベル(国、自治体、医療)では、その感染力、病原性によって、検疫強化、患者の隔離、感染回避行動の指示などで対応し、急速な感染拡大を阻止し、医療体制を整備する(感染状況の把握、患者受け入れ対応、治療法の確立、ワクチンの開発)など、今回のCovid-19流行時と同様な対応になると考えますが、その経済的、社会的、精神衛生的デメリット(小児では特に2、3番目)を鑑みると、どの程度徹底して行かうかがポイントになってきます。それに対し既存の感染症は主要なものはワクチンで対応できるようになってきました。

一方、子ども一人ひとりができる対策としては何があるでしょうか?既存の感染症であれ、新規感染症であれ、基本的には、正しい生活習慣を確立し、普段から感染症に対する抵抗力をつけておくことではないでしょうか。具体的には

①十分でバランスの取れた食事、②十分な質の良い睡眠、③日中の充実した活動(楽しく学び、遊ぶ)が重要でしょう。①は言うまでもありませんが、睡眠と免疫の関係が注目されつつあります。さらに、適度な運動は免疫機能を高めるとの多くの報告も上がっています。ここで、②と③は表裏一体であり、②のためには③が必要となり、さらに規則的な生活リズムが重要となります。WHOの「子どもの24時間行動ガイドライン」では、スクリーンタイム(テレビ、YouTube、ゲームなど)を1時間以内、運動を2時間以上としています。一人ひとりの抵抗力があらゆる感染症に対する最後の砦です。

感染症に対する構えとして、共同体レベルと個人レベルがありますが、決して逃げ切ることにはできないものであり、バランスよく対処し、うまく付き合っていくことが重要であると考えます。

普段から感染症に対する抵抗力をつけましょう

- ①十分でバランスの取れた食事
- ②十分な質の良い睡眠
- ③日中の充実した活動(楽しく学び、遊ぶ)



おわりに

手術・検査などに伴う痛みや出血などをできるだけ少なくし、身体への負担を減らし回復を早めるような医療を低侵襲医療といいます。当院ではこれまでも内視鏡やカテーテルなど身体に対する侵襲度が低い医療機器を用いた治療を行ってきました。

今年度から手術支援ロボット、ダビンチを導入することによりさらに安全で質の高い外科治療が可能となりました。これからも市民の皆様の信頼が得られる質の高い医療の実践に努めてまいります。

病院事業管理者 兼 病院長 矢内 常人

